未来のオリンピアンを育てる名将たち

小野幸一×内記徹×岩舘直也

全国大会で数々の輝かしい成績を挙げ、多くの日本代表を輩出してきた岩手県立不来方高等学校。今回は、長年にわたりけん引役を担ってきたホッケー、カヌー、ハンドボール競技の3人の指導者の素顔に迫った。そこに競技の枠を超えた理想の指導者像が見えてくる。

撮影◉清水健太郎（Eikoucamera）
文◉盛岡広域スポーツコミッション

Naoya Iwadate

岩舘直也

ホッケー部監督

profile

岩舘直也（いわだて・なおや）
1975年10月16日生まれ（45歳）、岩手町出身
岩手町立一方井中学校、岩手県立不来方高等学校、早稲田大学卒業

【主な経歴・成績】

1993年	不来方高校3年　徳島国体優勝（主将）　U18日本代表選出
1995年	早稲田大学2年　日本代表に初選出
	※2004年までの10年間で代表キャップ数140
2001年～	岩手県立沼宮内高等学校教員
2006年～	岩手県立不来方高等学校教員
2016年	希望郷いわて国体少年女子準優勝
2017年	愛媛国体少年男子優勝

〝強豪復活〟を託されて、県立沼宮内高校から不来方高校に異動した岩舘氏はどのようにしてチームを立て直してきたのだろうか。

「普段から、選手たちがどんなことを考えているか耳を傾けるよう心がけてきました。無理に高い目標を与えるのではなく、勝ちたいという意欲を引き出すことが大切。沼宮内高校と違って未経験者が多いので、練習メニューや戦術も一人ひとりの素質や特徴を見極めながら組み立てます」

現役時代の岩舘氏は不来方高校1年のインターハイで準優勝、3年の徳島国体では主将として優勝に貢献し、大学2年の時に二十歳の若さで日本代表に初招集される。その後アテネ五輪最終予選敗退を機に10年間務めた代表を退き、本格的に指導者の道を歩み始める。不来方高校に着任したのは2006年で、3年生にはTOKYO2020日本代表入りが確実視されている及川栞選手がいた。

「同郷なので小学生の頃から知っていました。チーム練習が終わってから、指導者だったお母さんとグラウンドに残りマンツーマン練習するほどホッケーの虫でしたね。私が彼女を指導できたのは半年だけでしたが、日本代表になっても時間を見つけてわざわざ教えに来てくれるので、選手たちのモチベーションは凄く上がります」

岩舘氏の教え子の中にもう一人のオリンピアン、2012年ロンドン五輪代表の田中泉樹選手がいる。

「後輩や同級生にとても優しく、いつも笑顔で素直な性格。基本は教えましたが、型にはめずやりたいようにプレーさせました。2年の時に日本代表監督の目に留まり、そのままオリンピック代表まで駆け上がったという感じです。（田中選手のように）可能性のある子には代表選考会などしっかりとチャンスを与えるようにしています」

環境を整えてやりながら、十分な伸びしろを残して山梨学院大に送り出した結果のオリンピアン誕生だった。

岩舘氏は競技人口の減少が進んでいることに危機感を抱き、多忙な時間を縫って矢巾町にホッケー文化を根付かせようと地道な活動に取り組んでいる。

「地元の総合型地域スポーツクラブ『楽々クラブ矢巾』にお願いして、小中学生を対象にホッケー教室を続けています。10年以上になるでしょうか。お陰様で念願の矢巾ホッケー少年団が結成され、スポ少出身者から不来方高校ホッケー部員も3人誕生しました」

蒔いた種が着実に芽吹き始めているようだ。日本代表として140もの代表キャップを持つレジェンド岩舘氏から、未来のオリンピアンを夢見る岩手の中学生たちにアドバイスがある。

「中学と高校のつなぎ目がアスリートにとってとても大切です。受験勉強の期間はどうしても体力が落ちますが、少しずつでもトレーニングを休まないことで、故障しにくい体を作り、スムーズに競技を続けることができます」

U18日本代表の三上舞子主将を擁する女子ホッケー部は、秋の東北大会で順当に3連覇を果たした。

「今月末に全国選抜大会があるので、まずは納得できる成績を出して、選手に自信を植え付けます。その上で来季に向けては、男子は全国大会出場、女子は全国ベスト4を目標に指導していきたいと思います」

自らスティックを握り、選手たちを指導する岩舘監督。
（不来方高校グランドにて）

Koichi Ono

小野幸一

カヌー部監督

profile

小野幸一（おの・こういち）
1974年12月29日生まれ（45歳）　山形県河北町出身
山形県立谷地高等学校、日本体育大学卒業

【主な経歴・成績】

1992年	谷地高校3年　山形べにばな国体 カナディアンペア第2位
1994年	日本体育大学2年　全日本学生選手権 カナディアンペア優勝
1996年	日本体育大学4年　全日本学生選手権 カナディアンペア優勝
2002年	岩手県立不来方高等学校常勤講師
2004年～	岩手県立不来方高等学校教員
2006年	水本圭治選手を擁してインターハイ4冠を達成

「不来方高校のカヌー部は全員が初心者です。信じられないかもしれませんが、水本（圭治選手）は漕げるようになるまでに同期の中でいちばん時間がかかった選手でしたよ」

大学を卒業して故郷の山形に戻っていた頃、小野氏はたまたま岩手県の体育指導教員特別枠を受験し、その年の11月から不来方高校の常勤講師、翌々年の２００４年に正式に採用された。ちょうどこの年に後のＴＯＫＹＯ２０２０日本代表の水本選手が入学する。まさに運命の出会いだ。

「努力したことが結果に結びつきやすいのがカヌーの魅力。水本は素直で人一倍努力し、教えたことのその先を考える力がありました」

努力したことが結果に結びつきやすいのは卓越した指導力があってのこと。外見どおり謙虚で温厚な人柄で選手たちを包み込み、いつの間にか全国レベルの選手を育てていく。最近ではスーパーキッズの卒業生も入部するようになったというが、どのようにして人材を確保しているのだろうか。

「私が直接選手を勧誘することはありません。先輩部員が『毎年、沖縄合宿があるよ』とか『成績が良ければ海外遠征にも行けるぞ』って新入生を言葉巧みにだまして連れてきてくれます」

笑いながら語ってくれたが、まんざら冗談でもないらしい。

「昔は『やる気のない者は去れ』という指導をしたこともありましたが、今は丸い性格がさらに丸くなりました。カヌーが楽しいと思うようになるまで根気強く指導するよう心掛けています。カヌーの練習って基本、単調なんですよね。それなのに選手たちはよくついてきてくれてると思います」

練習では小野氏が漕艇場の桟橋に立ち、メガホンを使ってアドバイスを送る。物理的な距離を隔てて指導しなければならないのが、他の競技との決定的な違いだ。時にはメガホンを置いて身振り手振りで指示を与えるが、思うように伝わらないこともままある。それでも時間がかかった分だけ選手との信頼関係が深まると信じ、決して苛立つことはない。

コロナ禍で全国大会が軒並み中止になる中、県内には競う相手のないチームのモチベーションを保つのは、想像以上に難しかったに違いない。

「これまでは先輩の活躍を見ながら『よし、自分も』という流れがあったんですが、1年生にはそれがないのが少し心配なところです。それでも核になる選手が育っていますし、選手からは『全国で優勝したい』って言われてます。何とか願いがかなえられるよう強くしていきたいですし、これからも日本代表になるような子を育てられればいいなと思います」

長年不来方高校を指導してきた小野氏にとって忘れられない出来事がある。

「5年ほど前に香川県で開催された全国大会で、カヤック種目１０００メートル決勝に勝ち進んだ9艇のうち3艇が不来方高校ＯＢだったんです。マイナー競技とはいえ、カヌー界ではなかなか例のないことです。あの時は本当に誇らしかったですね」

3艇の中の1艇が水本選手、他の2艇は当時日本代表の近村健太選手と佐山建人選手だった。ゼロ（初心者）から∞（オリンピアン）を生み出す小野マジックにこれからも大いに期待したい。

温かい眼差しが小野監督のトレードマークだ。（御所湖漕艇場にて）

Toru Naiki

内記徹

男子ハンドボール部監督

profile

内記徹（ないき・とおる）
1976年10月24日生まれ（44歳）　盛岡市出身
盛岡市立厨川中学校、岩手県立不来方高等学校、国士舘大学卒業

【主な経歴・成績】

1993年	不来方高校2年　全国選抜大会出場
1994年	不来方高校3年　愛知国体出場
1995年	国士舘大学1年　全日本学生ハンドボール選手権第3位
2001年～	岩手県立不来方高等学校教員
2011～2013年	U19日本代表コーチ
2014～2015年	U19日本代表監督

■インターハイ　2005年、2007年、2010年　第3位
■全国選抜大会　2013年優勝、2012年準優勝、2004年、2009年、2010年、2019年第3位
■国体　2013年優勝、2011年第3位

不来方高校男子ハンドボール部は内記氏が監督に就任以来、県高校総体では一度も敗れることなく、インターハイ、全国選抜大会は19年連続出場を継続中だ。

「ハンドボールには、基礎・基本の奥深さ、戦術の多さ、刻々と変化する試合の流れ、スピード感、多彩なテクニック、力強さなど、スポーツの持つすべての魅力が凝縮されています。その魅力を教え、勝利の喜びを経験させたいというのが私の指導の原点です」

２０１３年の全国選抜大会優勝をはじめ、毎年のように上位入賞を果たしてきた実績が高く評価されて２０１１年にＵ19代表コーチに就任、２０１４年から2年間はＵ19代表監督に抜擢される。

「日本代表の選手を預かって痛感したことがあります。指導者って選手に対してよく精神論を唱えるんですが、本番で実力を発揮できる強いメンタルを支えるのは体力です。レベルが上がれば上がるほどそれは顕著になります。代表監督として1年の4分の1をＮＴＣ（ナショナルトレーニングセンター）で過ごしていた頃、食生活を含めたトップ選手の高度な体力づくりを目の当たりにしました。不来方高校に戻ってＮＴＣでの経験を落とし込んでから、パタパタッと勝てるようになりましたね」

不来方高校にはＪＯＣ（中学選抜）メンバーとして全国レベルの大会を経験した生徒が多く、レギュラー争いは熾烈だ。代表監督を経験したとはいえ、エリート集団ゆえの指導の難しさもあるのではないか。

「実はここ数年、ＪＯＣは宮城や福島に負けて全国大会に行けてないんです。だから、数年前までと違って今のうちの選手たちって東北大会では挑戦者なんですよね」

長い間お家芸と言われ続けた岩手のハンドボールも決して安泰ではなく、中学世代の劣勢を高校世代で何とか盛り返すという構図になっているようだ。

「時代に逆行しているかもしれませんが、私の指導は〝高強度〟、〝長時間〟です。3年間という限られた時間で、チームとしての高い目標を持たせる。選手同士がお互いの能力を引き出し合いながら、ゲームをデザインし勝利をものにする。ここ数年この基本的な考え方は変わっていませんし迷いもありません」

現在の日本代表はちょうど内記氏がＵ19代表監督を務めた世代に当たるが、今のところそこに不来方高校ＯＢの名前はない。

「岩手の子は競争になるとどうしても遠慮がちで優しい。それでも安倍竜之介（大崎電気）や庄子直志（湧永製薬）、佐々木亮輔（豊田合成）とか、日本代表にあと一歩の選手たちは結構いるんですよ」

彼らの背中を追う後輩たちのためにも、ぜひＴＯＫＹＯ２０２０日本代表の座を射止めてほしい。

最後に、来季への抱負を聞いた。

「岩手のレベルが劇的に上がったのは、１９９９年岩手インターハイで不来方高校が初めて全国ベスト8に入ってから。地元開催は競技力向上に大きな影響を与えるだけに、今年のインターハイ岩手開催の中止はとても残念でした。新チームはこれから全国選抜大会の予選が始まりますが、確実に出場権を獲って、まずは全国ベスト4を目標にします。もちろん〝全国制覇〟を目指してチャレンジを続けていきます」

優位な局面でも決して手綱を緩めることはない。
（秋の新人戦決勝：花巻市総合体育館にて）